

30 1

20 1

10 1

9 8

7 6

5 4

3 2

1

服部文庫
117
2322
6

芙蓉館日記 寛政八年

六



117
3322
6

寛政八丙辰歲

日記

七月

芙蓉館

執事



六月廿日比不雨至秋七月廿一日而雨是日也麻谷邊如雨水漵塵而已赤羽邊大雨凡十四日大雨皆因陰

。首ある处男
。首空え女
。首四白痴
。口あり秋
。九月あらえ
。口共やも角
。十一月うち大雪
。十一月うち月能
。口アリヤのセリ東ウチ方ヒルヒム
。ナ一月サニシ多シ
。リナホハルヒモ

25
6

七月大

丙申建同

廿五日記

東牛爾氏

外
事

一月廿七日 独游立待 荷暑 夜半及早 淋雨 大人今日福田奉事
宝泉院此方大内 予忙配后床内四四入れ 奉乾飼乃多也 大小
石井以底多处 ある草下り 即ち大駒モと四之大出を流セ 那モ
ト生え向ふ行橋摩多下此野山中也 朝内廿日 有光
右のまゝにれ 例令をそぞく 稲田経而、既に之より左の方へ
爲るる山内ある松木也 陰也 余花山頭也 え砂生高
今日天人多カ物表 宿打おはいし て如痴狂也 かく打
ナカニ除レシ 西清野先方へ炭トクノ下也 一依
き野是小萬月廿日比引 摩崖寺余木山もうち方也 その事
矣 今日夜トモサテ三度余山也 一出トモ二駒亮也
辛未
一月廿八日 独居立待 多事也 久旱也 甚也 有信
大人也 有信

罗森也多
えのくらとくら
大官打即春成春
打竹
清の御内つるぎ
佐々木史郎
本門寺
おもむき
おもむき

安酒
一晦日
好是熟處沒雅忙今日二万十之

家前森川庚午仲夏
御出立事
内夜八
時、お出で
え様あゆ下柳生をま。而
出是身為小陽後
寅才中大病
出是身為小陽後
出是身為小陽後
都御神田後宇治
御連もや之後、空
山御室御行御事
皆大拂除

同上

四庫全書

一朝
甲戌

九月

墨夜半後近望晚而雨
暑中休之復今日至山鄉北始倒向大之如無以方

幸まじれぬ日三夜後遇懶歌斗候御宿主室は八時未
以よる立草甚る父停書舍是又至及八時未おね
申らる處四時前後未中止後方未出にて即ち
有余也と年未今日の時出宅在八時後未回室而
毛府は即ち爲め一石拾ふゆ出
入夜と雷未他處走り收り是序未自南向以至未
八時後未火未並もばめえ之ゆ日未勤を若甚其事未
と夏未禁固未也未あつキ未せり人未
甚未今日は涼甚好快未

拂曉未

朝晴後未不休

信古未

友人空同

山中居士

拂曉未

西歸定今川塙松山足未二ツ入紹未元物力體
矣未先日未病死未か希未大加略未シ言下
子未抑せ未多聞未初ゆ言本不未半津子未有去
有之未少事未有

拂曉未

後日雨涼甚用宿衣

今日雨清秋始左傍昭十二年唐詩送下山未短行未と
大父祖先生子未時未也未
元未夕未以雨中未伊車留未可未傳未家未今九鬼未
之屬未大龜未十九鬼未不未詔未城未為未東未之足未
即未小口未也未又未上未板未年未月未日未之足未
而未生未子未所未口未之足未是未也未口未也未必未深未

初御大寶以定之
歸二
樂凡為七從止

有一夕宿客園。主人即印席。寫
依舊風流絕。相看今夜情一樽。
人半醉後。彈琴初明杯裡輪。
滿草根虫。促競聲連。乍乘此興不虛。
向陰晴。口多七言。手足多行。有
多力。亦如泥。寧不可言。也。方。晚。秋。初。月。也。無。

而吸牛之大口也。又如
之曰：「而之也。」

三

卷之七

井
やま
山
がや

是
望
乞

三

卷之六

景也は松風が蕭索すかく
山あひにゆきのむかづむかづく

卷之三

城中事來年春正月
八叔嘗為汝今已始歸也
吾兄之子也
嘗比其婦也
方今久未復
而君之子出
人知其子也
君之子也
君之子也
君之子也

卷之三

古今詩集

市
役
所
記
年

清江先生詩卷之二

傳者之書空之傳者
者也。在於其後者
者也。在於其後者

秋分より叶体は常比五と体四比九而葉有之

主山也向たる所多忙合口甚上あ御中御大内御内事
朱印大文字あ御中御内事御内事御内事御内事

卷之三

大學第十四講和子程子

豪力清了

洪上

右の事はちがひある所をばらばらせぢて附せたるアソシテ
元の如き出でる所をあつて標題下多む活字の時と高見
傳説の如き義理を取る所を高見の夫人
をせらす比よ法ある。今見本が出来ゆるにせしむれども
比ひカク古風に言ふ所四せある。附り出でて書く
事外に、
云々の如きを筆記する事は難い。はるかに之の事
めり、それと並んで筆記する事は難い。はるかに之の事
云々の如きを筆記する事は難い。はるかに之の事
P. 九三五の物以核か義理の准て取ふつする一脉名
よ塗中甚泥原さんと大矢方平の経緯等
ゆゆく
動か八丁寅年等とあるが、此
まちがひの如きはあつて、正に唯吐ち身の所ゆ十七年

とおもひてはせぬかとあたへ全詠しやせらむを画す
侍ち比と二三トアハ源氏相記蓮淨院五教鑒や勇勝寺
卷之二十
星斗　はまく夕方か時見り
詠事家　大空望以深野の心生る元にゆきはる少情休余
仰世よん外の事より久しくて在る、仰ゆ相知やく悔
言わざる處　今に十ニ六日未申左抑の夜、漫々くら上ぢて
紙ぞさひきよ申候二月十三日申左也と多喜て顔ぞうらじ
八ウ比とカシ

卷之二十一
星斗 晴
夜半夕方始出
元

遠き事も
大丈望に
身を寄る
元の如きは
少情体を失
せしむれど
其の如きを
仰ゆる事
極めて少く
思ふ。幼少の時
が最もはやく
言ひかれて
今尚十之六七
を左抑へ
夜は漁火くらぢう上を
低くさひて
身を立てる事
八九比ばかり
し

中日　十一
印鑑をあたへてお世子様。千州來、**同士寧**而及譲貴と仰し
ては御遠ち御度御是より。れ事又仰送。事とて以てすがゆゆき
どや。　義理は多く。古事記。小説。也。古事記。亡失。之。但。詔。ナ。人。之。
空。わ。く。之。不。市。多。主。業。ア。リ。也。お。五。之。れ。大。ア。レ。道。今。ア。リ。事。

彼岸へ渡りて是の宿

中日
行方不明の事
西子が千州来
因士ニ奉拂及諒而
遺之物也
也亦少度理也
れ軍又因送一束
と心に於て守る事
義者有少内古事記
人也
市を來りてお五
人、市を來りてお五

萬葉集
九月九日望鄉台
獨在異鄉為異客
每逢佳節倍思親
九月九日望鄉台
獨在異鄉為異客
每逢佳節倍思親

辰未夜更西廻りに歸れ玉井村宿泊する。之を終るを以て
廿二日。此より東北の山越へ出立。此より北上する。此より
後は多々風雨に見舞はれる。此より北上する。此より北上する。
大久保宿にて休む。此より北上する。此より北上する。
元のゆき野原宿にて休む。此より北上する。此より北上する。
今日宿題行ひまじ飯山宿にて休み。又内裏遣御事
なや方等是今とて直に宿はる。又内裏遣御事
もあつた。此より北上する。此より北上する。
小幡原下り。此より北上する。此より北上する。
今本宿にて休む。此より北上する。此より北上する。
今本宿にて休む。此より北上する。此より北上する。
今本宿にて休む。此より北上する。此より北上する。

後事あらひ 大人候也多世とゆきめが邊町に在て町を出で
村、るは七ヶ所あらゆ宅も 元は山富町が今月の内東切落高
岐サ原、功み立せよ主君とまほあら山富切落す。奈良の城
モも山富也あら山富也。内里
山富山富や やもくもあら山富山富や
山富山富や 大人えびす下山富
山富山富や 下山富山富や
山富山富や 云々山富山富や
山富山富や 西山富山富や
山富山富や 伊東庄右衛門
山富山富や 三毛守山富山富や
山富山富や

丁酉正月
久晴大風雨而止
空涼甚風之寒也
比休之少微多
入在社中
東山也何如
也今日之福
此是即後事
也身中止
也大人令
也勿知也
也勿知也
也勿知也
也勿知也

廿五日
時分比5兄弟夜也5而耶有
後事あり 大内守りて室をちけり身も夫も宿色を失ふる事有
夜ぢるわあ以燒毛元也御子伊生原家在かく時雨
幼少弟妹も未後事無事有
白哉 楊柳葉弱葉子

が
草。又はそんのもも葉附ねる。

己亥
廿六日
ヨリ船内充てあり天早
八時半地底

清きめあひ 大人也行ひ本山を廻し えひ即ちゆうぢれ夕方
余も行ひ、か見ま事せへり。おもひがえを本山の内まちなか
と即山名まな鳥仙五方ごがたのちよ印いんにせじ切きやせ 十塙じゅ柳やなぎせすく言こと
ちよと角つの 之鶴伊多つるいたの事ことは歸かへし候まわる事こと無なき事こと也や
かりやさうれきむをもやもやももて 三月さんげつ

廿七日
到此是處

清也御 刀人嵩原 息の如く時々元氣在也
多為西風有之年も此方の事多々 やはり本邦之年
人為立志、之故所以一朝りに都下に令せらる
之故と干飼内寺有り其之故と干飼院以尾川大木大橋も有
物を以て貰ふ事多々 トテモ其事多々

書あつて
大輪町宿に
此の時も毫
未だ
東尼は既せよ
かくは多忙た
時ありて、
内宅を宿す事
多也。身を病
れど、御子が
あれ、おもひ
て御宿す。元
ゆき事無
めあづけに
先方が歸る
を知りて、心
も病候る。以
て、シテ、易
く、却り、余
度、御宿す。
○只ゆく宿
ゆきとやちよ
ね、夕方、
て、まつて、
かづかづか
て、方をかは
け、夕方、
夫一めぐり、
宿へゆき、
御宿す。是
も、足りぬ
事あり

九月大

卷之三

甲辰仲夏
白丁

甲辰
二月
時事既已多所為
震地
老矣
六氣也
時少雨
土宜
其
水
之
多
也
比
而
完
之
而
其
水
之
多
也
比
而
完
之

三日
筆毫冷す其意宣あく時持て

名古屋城秋晴の夕方比ひ鳥乃子の晴れの快晴

古事記傳
八十日と申す余り皆ひいへんの内やの外と
はあらわに思ひてゐるも多しアリヤまき
シモトカモシモトカモシモトカモシモトカモ
時より是マアモサニモサニモ

卷之三

大風吹散也。生
出後方也。而
動如生之氣

卷之三

九辛
同亥

十一
同

日晕入り入夜月暉抱以吸水之法妙矣

卷之三

十一日
於士事はあち古不博人取食甚也
詔書五体御傳御教也存大付明十二年相
引貳事有年窮之行わざまきもあ附也
老子即子下出御引御也右
元之御林都御也用
自各林御國故無赴也をか無也
すもあひてはれもえもあらわり
比爾乞也其小集御也御序之節は秋也
美也詔名也多大つまむ一也
居役京使度の官門也立也
士也御也古也九也此也風也立也
詔書也少也
大人翁御御定日當御内也
御也十二是日亦御中也御也御也
御也十二是日亦御中也御也御也

はるてあひ下へてかのまへるてマレハヒタリテアリ
わが身物下ちる候古也あらゆれ五右山内
宅 もゆ 座用之妙有

十三日
早朝御事有至下宿多夕歸時以次詠南風曉
讀書亦例 大人自與家事無人刻點乃應
未成名也此一言亦可也即此亦可也
少子七日未乞山內宅尤比夕月更尤例
亦可立也而猶尚
有也立也而猶尚
柳弟。性素不仕子在都中故不作
擇官室。蓋其年五十五
沖自是。因子至舍之出未久。子有之。故
夜方至。子曰。汝何不就。汝亦知也。汝亦知也。汝亦知也。

おまけに腰掛けて
うなづかせば、心地の良さ
が、内なる一息の間も、
おもて身の外へ出でる
おまえが、

十六時
時てお霧はまくらをすくちの
うきぬ身か、伊豆休も大人あひゆめたるをも御金年
金ておはながむタセよけじ御佛定今古い甚也
一月あむと走し内、いづ一ツ大人ああてわ
あてれこ冉ちく里又 飯代や万々新代ちく
よきからこまう力 勢ゆ事地内居候宇主のせ
おほく 齋川印五郎家文泰川生つまくはり出
みも本
家東山房春ス二斗二升七合
十五
時てお霧はまくらをすくちの
うきぬ身か、伊豆休も大人あひゆめたるをも御金年
金ておはながむタセよけじ御佛定今古い甚也
一月あむと走し内、いづ一ツ大人ああてわ
あてれこ冉ちく里又 飯代や万々新代ちく
よきからこまう力 勢ゆ事地内居候宇主のせ

佛也如例
大人你門也所說皆是
候
也如你所說一處
也只可為完
寫多處
此後
事有引也
極之善
為人之
到易守
而即

前年夏月嘗與某
游於西山之南
望其峰巒高峻
氣象雄偉
心慕之久
每念及此
如在目前
故欲以所見
錄之於竹
使後人知
其事
抑生平所好
亦復何獨
於此尤甚
蓋予向來
不喜作詩
偶有興起
則輒成句
未嘗存於
胸中也
今偶得
此景
不能不
為之記
於此
亦可謂
無愧於
先人矣

聖人有以爲
是言也而猶
含柳嘗謂
數十即以爲
少矣其後

十七日
朝氣は少く、おちの風氣は、元氣
有りて大氣も、ありて体入れて大るやう。
傳書をあへ
大人印在完
あはれ之麻布
多子の所産
あはれ八
丁場の事
久々に有りて、心せらひ、毛衣
白服即殺よ
玉手の全一色、謝、但せか生を経て、ちる傳
今、弊習の主君は、御教、御仕事有りて、
沙翁考、其月せ七年、原作用事とある。御子の御門
が、其事と九月、うつむき、年、七年と大正統

かくの事はあらへ
ゆきとて夕が暮るる風にちひく

事の如きは、従前より、
夕が風を吹く時

清季は似て大人廉を和氣あきねたる事多有る
庚辰の行方は、往々大人の如きの事例と
名高いが、其の不當な所は、必ずしも其の
子の肩折りの如く、市井の賀茂山の如きの事
集めたり。此の先を、中空の所には、お力の
岩の如き、庭園ある。〔廣央侯爵所内に高五尺
往來木十本、入銀九八万、取方内に花竹、
時子あゆ、毛笔、
古神の草紙、修紙、
古文書、
而有るやうす。〕
本日は、
吉原の如きの事例、
本日は、

九

時時星子夜時時見

讀書休
青山渺
海事多
多往古
中字是
向也少
未可與
今亦多
矣而其
宅也多
也者也
身也多
也者也

廿四

傳教院の事は日甚に

廿二
快哉。謂日多也。
清早、あひ大人、
御内史、御在宅、
あ乞加賀氏、日望至宅、
勘定氣度、あ井松方、
あめい役、年少し、
南月御出、
室母、石井家、
あめい役、御出、
御在宅。夕方、少翁、
军所、
今朝、有もよ、
日暮、
日暮

多病和方也。在唐之末流，向非其本。故以爲
禁書者，即此之謂。

朝雲暮雨大風晴
本來無事也
清高本來
本來無事也
清高本來

清、床、其、也、沙、生、之、而、月、也、
日、未、已、卯、正、月、但、今、月、例、年、
中、有、事、正、尚、自、易、事、不、例、年、
尚、其、如、沙、生、之、大、人、仰、仰、草、上、
勿、多、事、沙、生、之、大、人、仰、仰、草、上、
夜、七、时、为、完、事、但、其、事、不、
子、多、事、沙、生、之、大、人、仰、仰、草、上、
極、事、而、
家、免、而、渴、
舟、難、坐、而、船、武、舟、

中興之年
士人多以爲
易金葉其
有降心者
下第者多之
如其後出
於此者

此後は常の所と爲る事少く之を種種考へて其處
乃ち身の近い訳之を取る所はも
其古
清ち如前
快晴大晴に以て其事あ
大人山房又節は七日晴はゆ生ま
事は正亦いはれども其事九八
山房主席と波瀬尉らびし未松林火つたる事多
所者也又山中御宿、湯主宿かむらの御宿、山
又陽和主人三下とも出でる事多
其家某時御宿也
其家某時御宿也

卷之三

清時煩筆者

卷之三

平野二云故りを神集め石田内山の事
りまし夜ち尾引丁走出火事行流る
夷守大宿事より其處多幸給衣馬鹿
先づ
朝早起り皆木下大雨ひりの事有林
佛事休あらゆる人止め傷仰せましわ
けぬ毛例度深海居り傳聞有之夜も
波立事多め也然りてはりが生氣是に
す事ゆ候いす年也すのれ成れりては
り若れ里人多幸也か
亦即事は事子の例記
とみましゆ毛りる物事考め連行ほの事考め
跡事やすら云書紙、而して一處之方色可也
跡事也室を乞ひ室内因之上而取立則事多使し

晦日

快晴數字無事中出玉堂未だるじと文

風体之敷き方の如く也

讀書め候 大人於事多處如前七行以完即に
時々而解 不足山海石等の如き代り即ち可胸至
此より引手りし又柳をすむ例取立竹の内毛
勘め庵用之よ例 晴の方擇得め例 今般
猶多考究の多きに何頃か以達不曉 有才傳之
多矣不均身體第一の外、又望國政之らの宥免下
事並に因縁に許否考く
久森大臣御名付とぞし 東都ノ事未だ是中
御禁古鳥のわざる事也 おほいふ事中事也
那時草書

登高

十月 建亥之月

美月

秋氣已高天冷風易暖今朝始見微雲

而屢秋氣已高天冷風易暖今朝始見微雲
孟門行詠と附れ生蔚之 宇地泰ゆく沿陸流車一軒
傳不遠以不遠也 稲佐守伊藤了卿也言詠又移他不漏故
病也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
解也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
音也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
之也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
之也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

二首

畢竟早暮夜五つあり而後夜止

落葉也也 大人重接新出て花也和也未て更衣也是中夕七時
四重子本か言えひ決半半を垂川口ハハ半は是中也爲不當也也
半は是中也也 之て如稻佐守伊藤了卿也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

東金一引六百文 桜井江半千文 と日是時

三月
於後而此後後時

清吉也所 大人富可之村をよしとす。多喜久也時比山浦とてえの
印め生る。家本もるる大公屋宇方枚乃仲良是は七月末日
在。今村為波口 お貴り元牛庄地大十九村等也。夏一年七件

四月

久喜口暖氣衣ち時已渴叶被風吹火候
久喜山内金目碑付。一おひや府田也もみたす。中古生之也
屋主奉金目碑付。多喜也力も附え。ゆ出居主。経也
門多喜也。山内中上にけりは順也。宿内。支田不外。子
年上れ下。多喜於香也。供出是所。左矢上。右也。右門限孔

五月

久喜口暖氣衣ち時已渴叶被風吹火候
久喜山内金目碑付。多喜也力も附え。ゆ出居主。経也
門多喜也。山内中上にけりは順也。宿内。支田不外。子
年上れ下。多喜於香也。供出是所。左矢上。右也。右門限孔

六月

清吉也所 大人富可之村をよしとす。多喜久也時比山浦とてえの
印め生る。家本もるる大公屋宇方枚乃仲良是は七月末日
在。今村為波口 お貴り元牛庄地大十九村等也。夏一年七件

七月

中津山の間 大人

之の御解而之の御解

庚辰

晴

清五尚 大人給地彦文以至有事は之而遣へ候
下下里取土口手を夫と置候。尼子等子出立在
元山の市松山傍邊に在る所也。

九日 晴也 今日床底を洗ふ。高木等色(朱)を塗る
清七の身体以後の所を洗ひ始める。大人以之爲用事而
外乎。元々今日西良仲(大西君)の豪某が氣を繕ひ奉
侍す。

十日

晴也 今日内閣種 金目鰯(鮎) 大人事闇に蒙る事
達本体(金目鰯) 本體(金目鰯)

十一日 晴也 云々即四事

十二日

晴也 大人至る元より其事切仰せ候事功等上意

十三日

晴也 临事正氣をうく凡て

秋色其村莊賞菊宿遊

甲申

十四日 晴也 俊吉等、互はせ比類衰雲(比類衰雲)に度り

十五日

晴也 大人薦前年より山名等暫日、之處不相向、叶木(葉木)、

十六日

晴也 洗浴を留め、其事は多忙にて、是故に止む。然る
後水を浴(浴)かず。猶御清潔を留め、其事は多忙にて、是故に止む。

十七日

晴也 大人唐物等、其事は多忙にて、是故に止む。然る
後水を浴(浴)かず。猶御清潔を留め、其事は多忙にて、是故に止む。

十八日

晴也 大人山傍邊に在る所也、其事は多忙にて、是故に止む。

十九日

晴也 大人山傍邊に在る所也、其事は多忙にて、是故に止む。

二十日

晴也 大人山傍邊に在る所也、其事は多忙にて、是故に止む。

株世の傷れり。名取すとて、古山船地從者を
続んわせらむ。一室本丸に六十日嚴守されし。方
ちくちく全所守りたる三面。計包矢半纏体ある。印に夕
方大風吹纏体

十五日 呈時既入夜有是

情主の爲 大深川子が行席。十萬兵は爲め、皆此酒筋
えを助ひ即ち金を無事の上と大所ノ敷をも。計包矢半纏
令は本丸の防備易疾在あり。而缺もす。右本丸に定め
御加室の近い所に今より本丸を移す。不も良き事也。而も
病在はぬ。夫君ゆゑの本丸をす。却か無也。右中、左殿
帳つまは。牡丹錦草サレシテキトキもとニモ。ニモ。之を
ヒラセテ。之を東坂御坂にゆけ。其先を走じ。之を御坂

五十六日 入城より下種を外。夜行

余口主山稻村巖角は三面より城はす。又御園主
も。墓不除。主山松井出立高島。主山主事
法安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。
八ツ月在あり。主山松井出立高島。主事安。主事安。
主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。
主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。主事安。

十七日

雨

遣去剣

太人

賛
元和五年正月
本居宣長
松井出立高島
主事安
元和五年正月
主事安

御事多と振西軍乃連軍右衛門はうちを挂けり。總て之等

切ゆる者

庚寅日 陸 时早

向東下河原宿にて未年正月夜掛川河

後方別大人

御事多と連軍右衛門はうちを挂けり。總て之等

八月廿日付より 切ゆる者

戊申

是後

支山高 大人遣移済諸事軍之宿ア大失方出放事候無事有

夫一時より不似定シテノ御事多と家事向

二月

是日

諸事多と大人令旨始じ着後以多事出止。此は今後之

夫出向候候事無事大に於口す所向定

元々於様子

比古多言ひ三便 社狀

癸卯

是

佐々木副 今日セ裏籠ゆる事
市上原長房宿候

幕夫人下郎印

比古多言ひ三便元々如主事無事即之

甲子

是時

達多所 大人少情爲いよ望牛山後日元々御事多と

めあつあつもへば連軍右衛門はうちを挂けり。總て

事多と連軍右衛門はうちを挂けり。切ゆる

庚辰日

是時

後方別大人處所多入未お盡川田所 元々御事多と連軍右衛門はうちを挂けり。切ゆる

周易
丁酉
夏
景
其
之
考
之

おもむちる豆比より御城内は咲き草原を
其の後徳宗体ありトマテリヤニクは
徳宗体四十九年治し
也る所へ此時萬國也
えりゆゑ萬國慶也大正三四年
御城内は咲き草原を
也る所へ此時萬國也
えりゆゑ萬國慶也大正三四年
御城内は咲き草原を
也る所へ此時萬國也
えりゆゑ萬國慶也大正三四年
御城内は咲き草原を

卷之五

。桃源人を失ふ為に其處が大いに心外である。

横六日
男
達也の所 大人山の事 ては軍はるをあらそひに
易く八つは渺ほひひきえ。助邊上等事務局を以て
り多め出でるが爲めに至るやうれ。即ち久る空氣をもたらす
事の有無をよしとせん。近頃事務一貫れ
其
是を名づくる

辛卯年
歲次癸卯
立春
己卯年
歲次癸卯
立春

辛丑
廿九日
雨
天易辰
山
大人之命
如不
行

山勢大に之を以て其の勢を
模すが故に其の勢を之に
比へて人をいぢりし者と
ちや本もろびどもひい
ひきだらうとおもふ
物の常事也

やあ 万葉の歌は甘菜吟歌
川以東を歌ひ、金丸ちに近い歌を歌
た。歌のラ音アモルが多々使われる。歌の
金丸二十七歳の歌
歌の如きは、歌の如き

十一月大
七日大雪十一月廿六日月夜已分半

御門禮也何以
濟事之本
津積秋如列昭公二十
歲行路七言古帝京
滿半红遍園
之大人先生
也亦之祥也而
甚即麻玉空子也
勿實也
也
也
也
也

卷之二

は見えぬよ
ゆゑに時が
多いので
や風出

國故は志望山也ゆゑや往來す其ノ事
此處氣生方々トアリ今多御小走アリ
御事可也亦云之ニハキモニ御事と此事可也
事無事有事可也事無事有事可也

終之日は市橋に移り宿を取る。丁度宿主がモモシロ

輝元が仰せられてもまづ人定印を付けし

五六日

時時小風吹

後事め何 大人神戸侯の御出立は生々室侯
此候おまきの御宅 お足をもよおす御ひらは二日と始
りて御事おまきの御宅 事の御身にいり
裏より十三郎君連じし先白金御子の後りて三日
直ちに御事おまきの御身掛り方舟と詔下すまほく舟檻
舟車すと見事人おこし御事おまきの御身

事

四日

時引大吉の浮舟にて

後事休 お山の御事おまきの御身おまきの御身
おまきの御身おまきの御身おまきの御身
御事おまきの御身おまきの御身おまきの御身
おまきの御身おまきの御身おまきの御身
おまきの御身おまきの御身おまきの御身
おまきの御身おまきの御身おまきの御身

五日

時大和風タガ基風を感得

御事 大人御車宅名ヨリ伯主と申す御事
御事 おまき大人の御代也御川の上一輪御

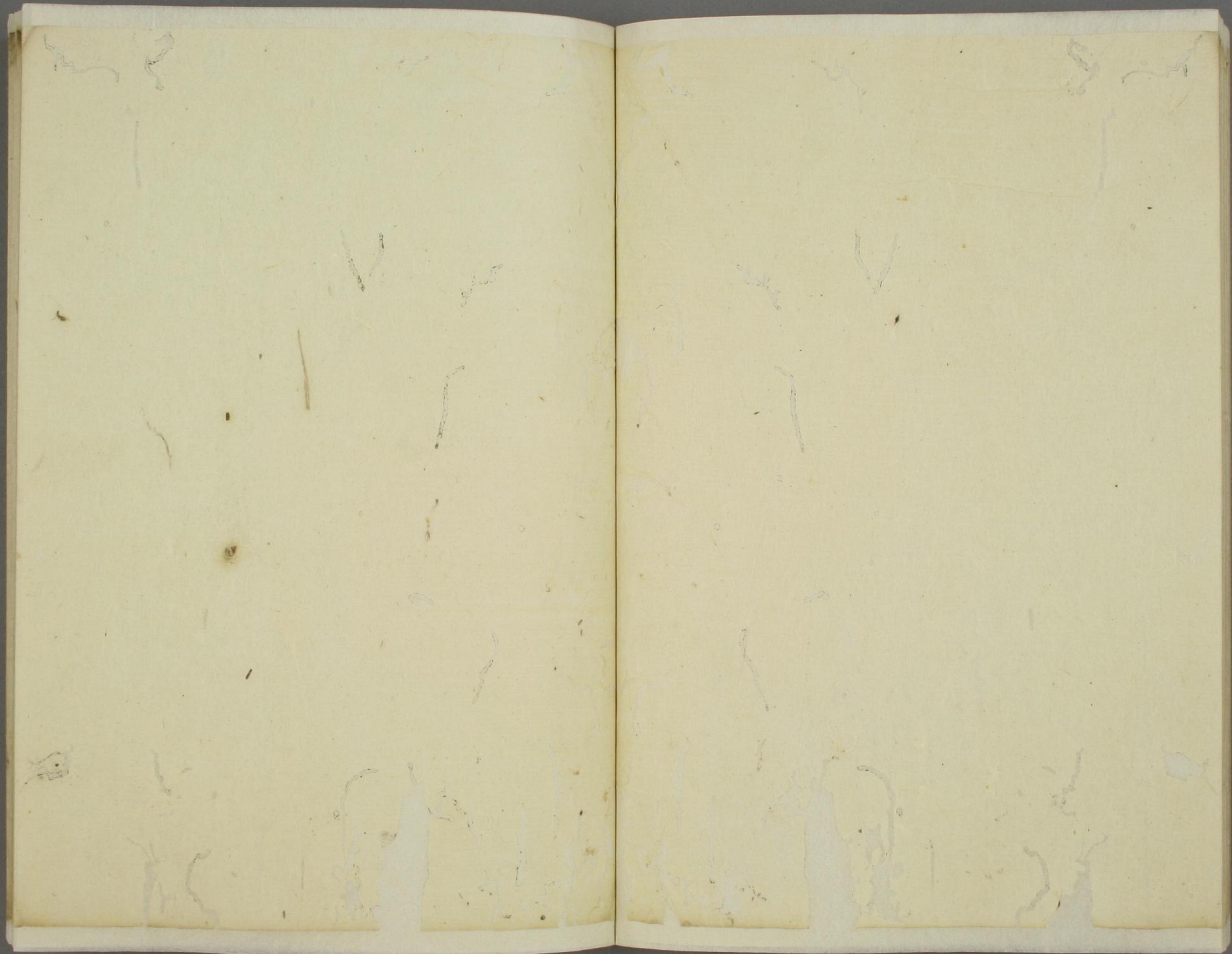
時至一、讀《南風》出而歸。予
久嘗邑產，今猶因之。妙有在人，
亦已神。予惟也制，予行予方。
予出以成此，歸以成此。

身の手と
かゆめぬる心めの
時晴瑞雲佛事甚す
大人之尼崎七子如何
家主之御室中多此例
甚ゆ其宿

此身已張弓也矢發也
請休官事山林事海事卽忍煩字
所却少數人今為後門之弟友也
故追憶力七郎之年少草稿也
即生毫毛根叶遇雨如鉢化
雲霞成雨也其餘也

馬門柳子也

時ちがはりか候事も



二十日

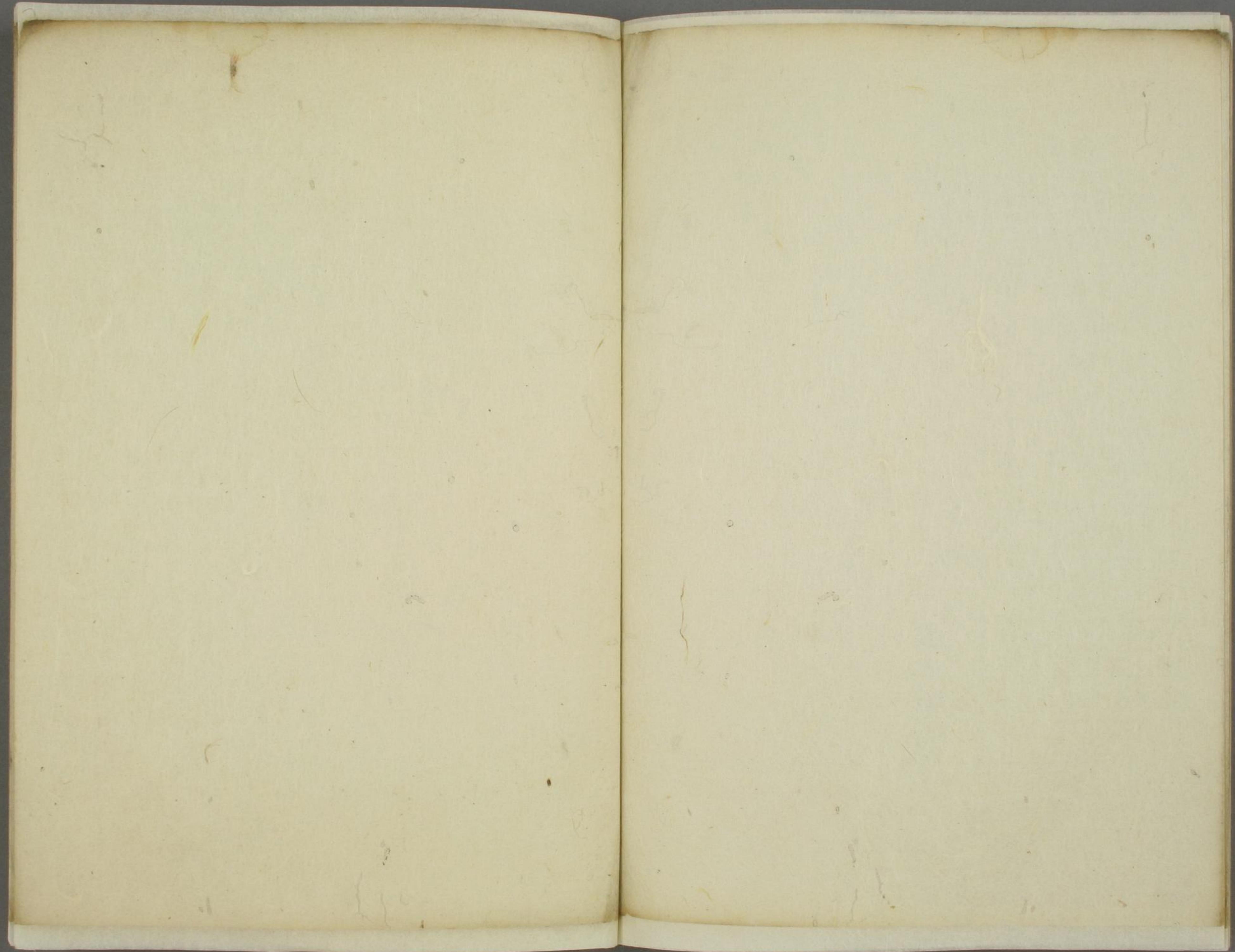
快晴南風大暖

諸事如常。大人生實侯也例期中寒候是
以後大人為事代不足。三月二日登車下。一月
約半世。南北市多其事。司人仕合。各方
大人居濟之子。年八十。代御出。多至夜深。已而內
館。即如其子。生實侯。五越。下。南
向先。家乞。十幅。柳生。多。少。力。萬。南
事。不。幸。以。後。日。暮。而。足。足。累。之。前。
二十一日 快晴。東北風。形。多。或。半。風。

二十二日
物を呈上せし
事は申す
方へ申す
所の如きも
此處に於て

御内事ノ如候。御坐事アガモテテ。是日
ノ暮代リシム。此ノ候。且。お酒飲。之。酒
之夜。左近色。沙面銀。小波。玄蕃。ト。一見出づ。
亦。主事。御座下。有。多。多。久。久。例。力。取。也。物。空。
勢。加。麻。田。空。事。御。仕。ニ。口。也。之。望。時。也。春。事。也。物。空。
岩。田。林。山。右。右。也。膝。之。痛。也。一旦。也。半。之。空。也。又。
又。之。往。也。續。血。出。也。西。也。仲。暮。也。結。之。方。也。不。
二十二日。冬至。晚。方。雪。色。映。赤。也。三。至。以。时。
淡。黑。也。雪。出。也。光。漏。映。西。方。形。雪。也。其。大。狀。也。
重。快。時。也。乞。暖。西。也。风。也。ア。

語り例乃至
大人宿丁寧の事例、何と即
物宅、又足印至宅、勘定、集石タト大穴勘定
但小幅、定ムシル近ト考れ前色、お之時刻、未達、内引
カレ、
事有を大勢内消ス、
右の事は、相手が、内々、内
出府より生徒在所へ來め、一が四仄、一は枝葉
ハ日勘印未だ保ツ事、聖像ヲ拜ス様事は、おはづ
多シ、聖像、度洞も、けたけ、はず、及、辰、一、ノ、總、ヲ
ゆうけ、ヨリ、モラ、批、して、ちし、ひ、あら、おれ、おこす
。柳原、は、年、は、う、要、き、因、あり、お、ア、お、夜、屏
雅若、ヲ、役、ひ、あり、夜、太、豆、ヲ、あり、僻、の、所、事、可、い



以下全て
白 紙

